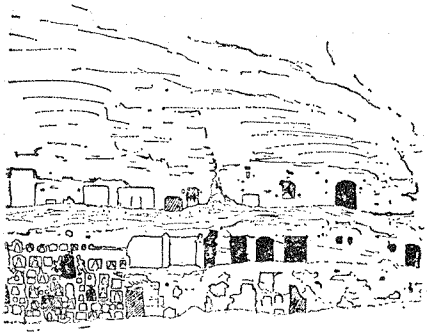
慶陽寺溝石窟について

鄧　健　吾

はじめに

印度から伝来した佛教は、四世紀に至って中国内地に定着しはじめ、以来六世紀にかけて各地に佛教寺院が造営された。その大部分はすでに失われ、文献が語るその豪華な姿をしのぶにすぎない。さいわい華北には敦煌、雲岡などの石窟寺院が現存しており、新中国成立以後にも麦積山、炳霊寺など多くの石窟が発見された。これらの石窟に見られる建築・彫刻・壁画は、それ自体当時の社会・経済・文化を解明する重要な内容をはらんでいるが、これまでの研

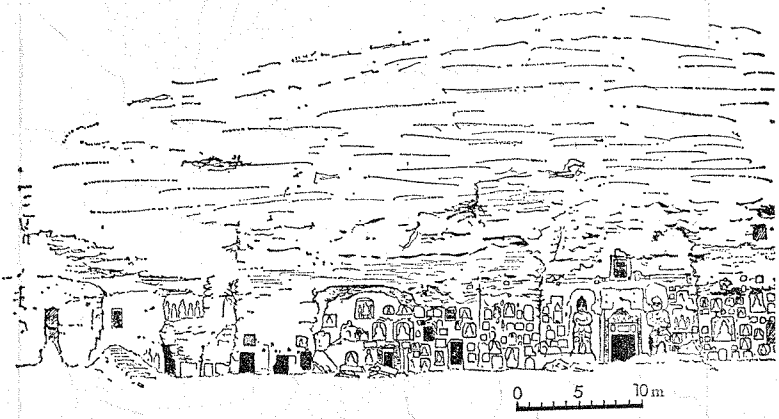


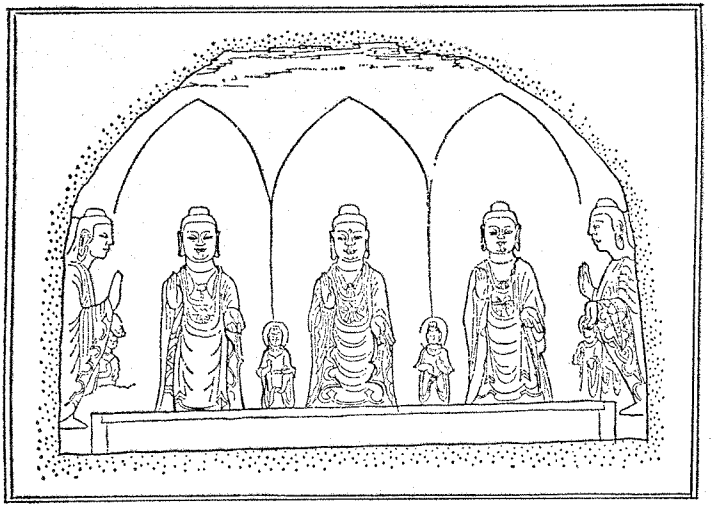
究は充分とは言えなかった。

私は、一九六一年より甘粛省天水にある麦積山石窟の調査を行ってきたが、あわせてその周辺の佛教遺跡との相互関係を考察するため、一九六二年九月に甘粛省慶陽地区に足をのばした。慶陽寺溝石窟は、一九五九年慶陽地区で普辺調査の際、甘粛省博物館の調査隊が発見した北魏から唐代にかけて開かれた石窟で、地理的にも麦積山石窟のある天水地区と近いことから、麦積山石窟の北魏窟との関係を期待したからであった。

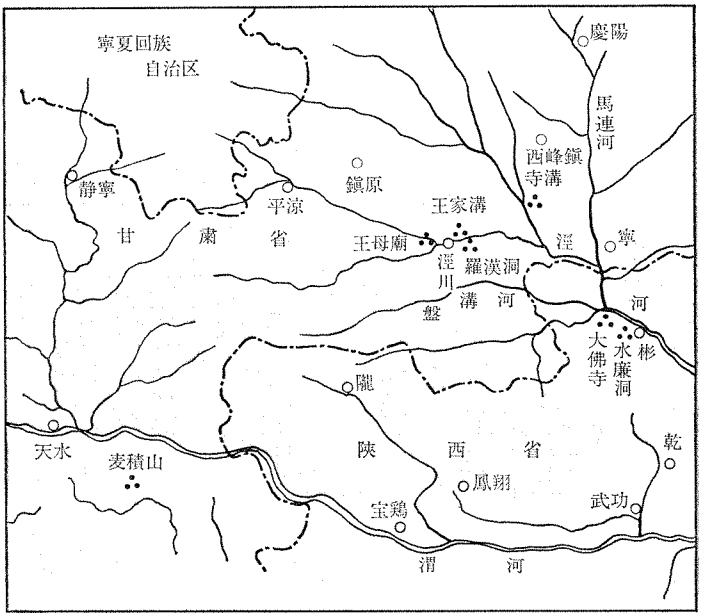
慶陽寺溝石窟の調査行は、私一人で短期間のうちに行われたため、収穫は十分なものとは言えない。また、慶陽寺溝石窟の構造と造像様式は、麦積山石窟のそれとは期待したほど近いものではなく、むしろ別系統のものであった。しかし、窟内の北魏造像はほとんど完全な姿のまま保存され、そのうえ造像の絶対年代・造営者・造営の目的が文献によってわかる稀少な遺例として、佛教史・美術史的意義はきわめて大きなものであった。

挿図 1　慶陽寺溝石窟立面図





挿図 2　佛洞東壁立面図



挿図 3　慶陽地区石窟分布図

一

長安から蘭州・敦煌を経て西域に向うシルク・ロードは、咸陽で二つに分かれる。一つは彬(汾)県から涇河にそって涇川・平涼を経、六盤山を越え靖遠・蘭州に至るルート、一つは渭河を遡って宝鶏・天水・隴西・臨洮を経て蘭州に至るルートである。渭河のルートは甘粛に入ると谷がせばまり峻険なので、多くは涇河のルートが利用されたようである。東晋の僧法顕もこの道を通って印度に向った。涇河に沿う道すじには、彬県の水廉洞・大佛寺・涇県の羅漢洞・王母宮・王家溝・慶陽県の寺溝など点々と石窟寺院が開かれている。

慶陽県・涇県・環県・寧県などを版図とする慶陽地区は、涇河上流に位する高原地帯でオルドスの南、長城の内側にある。行政的には現在甘粛省に属しているが、その東端にあるためかどちらかというと陝北の色が濃い。土地は一面に拡がる肥沃な黄土の堆積で、雨水の浸蝕によってできた大きな深い溝が陝北独特の段落を形成し、耕地にはムギ・トウモロコシなどが栽培されている。考古学的遺物の示すところによっても、古来漢民族農耕民が定住していたことがわかるが、長安を首府とする歴代封建王朝の時代にも、ここは穀物倉として重要な位置を占めていた。この慶陽の高原を深く削って幾条もの流れが涇河に注いでいる。寺溝石窟は、涇河の支流である蒲河の寺溝門によって名付けられた。門というのは両岸の岩山が対峙するからで、蒲河の水はすぐその河下で茹河と合流しさらに幾条かの河をあわせて涇河に注ぎこむ。

寺溝門は、慶陽専区官署の所在地西峰鎮から西北へ二十km余り、古くから鎮原・平涼へ通ずる要路にあたる。現在は慶陽県に属しているが、解放以前は鎮原県の管轄するところであった。歴史的には、北魏は涇州、唐代は武徳元年から貞観六年（六一八～七九〇）まで彭州、その後は寧州に、宋代は原州彭陽県に、元代は鎮原州にそれぞれ属していた。

寺溝石窟は蒲河東側の岩山、寺山峁の崖に南北百十mにわたり開鑿され、合計二百八十余の窟龕を数える。石質は赤味がかった砂岩で、やや荒い。なかでも第百六十五号窟「佛洞」は最も規模が大きく、その他二百四十号「菩薩洞」、第二百二十二号「羅漢洞」等数所のやや大きな窟がある

が、規模・保存状態ともに「佛洞」には及ばない。

「佛洞」は寺山峁の崖面の中央に位置し、洞門付近の外壁は他の崖面より深くほり進めている。洞門の上部には明り窓をあけ、窓の左右の外壁には梁を嵌めこんだとみられる溝を一直線につけ、溝の両端には各々梁を差し込むための枘穴をつくっている。洞門付近が他の外壁より奥に後退していることをも考えあわせると、「佛洞」造営の当初から外壁には木造の前殿が造られたに違いない。洞門の左右には基壇をつくり、その上に大きな金剛力士と獅子を彫り出している。洞門をはさんで約二十mの外壁には、七～八十の小龕が無計画にほられているが、大きな窟はない。中央には大きな「佛洞」があるので、やや大きな窟は崖の両端に至らなければほれなかったのである。このような状況と各窟龕の造像様式から判断すると、「佛洞」は最も早く北魏に完成し、続いてその外壁に小龕がつぎつぎにほられ、時代が下るに従って南北に発展したことがわかる。窟群の南端に至ると崖を上部に彫り進み、窟が三層に造営されている。南端と北端は則天武后期の造像銘があり、端正な盛唐様式の造像があるが、保存状態はよくない。

「佛洞」の内部は高さ十三・二m、深さ十五・七m、間

佛洞西壁上部浮彫　サッタ太子捨身飼虎図

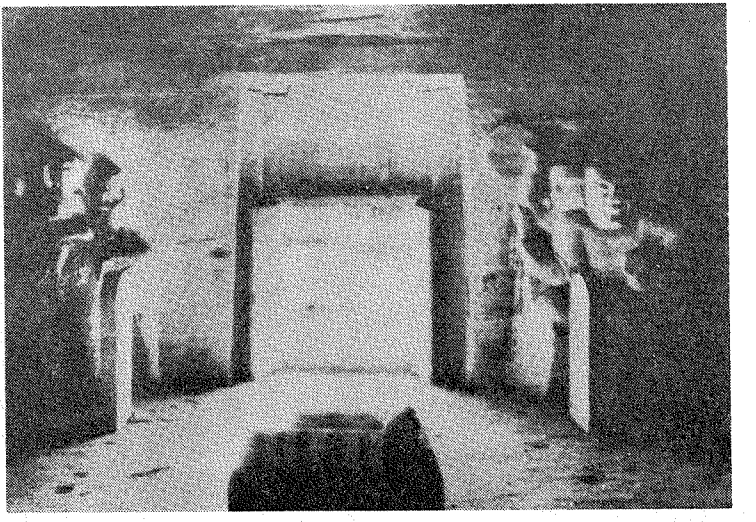
口二十一・七m、長方形の平面をもち、天井はゆるやかな弧をえがく四面の台形と最上部の平天井によってなっているが、最上部は地下水の浸蝕により原状は止めていない。截頭稜錐形天井窟或は台形藻井窟とよぶべきか。東・南・北天井の各台形面には下の壁面から佛像の光背が延び、その間に伎楽天・飛天・供養人等が浮彫りされ、前壁である西側の台形面には、明り窓の左右に千佛が、その上部には『金光明経』巻四捨身品によるサッタ（薩埵）太子の捨身飼虎図が浮彫で表現されている。(1)

上部は風化して判別し難いが、明り窓の上部すなわち台

形面の中央に山岳を表し左右二つの画面に分けている。明り窓に向って左側（南側）には、四段に分割して王子捨身に至る経過を表している。即ち、釋迦が前世に摩訶羅陀王の第三子摩訶薩埵として生れ、竹林中に七匹の乳児を擁する餓えた虎に逢い、大慈悲心から懸崖より身を投じて、我が身を餓虎に食わせるという場面である。右側は二段に分

佛洞東壁　脇侍菩薩

佛洞東壁　七佛立像



佛洞西壁門口両側　普賢菩薩およびアスラ像

け、王后が寝室でうたた寝をしている時、夢の中に不祥事を見た場面を上段に、大臣が王の所に来て、王子捨身の事を告げ、夫人が頭髪を乱して地に転がる場面を下段に描写している。中央上部に舎利供養を表し、舎利壺の左右には燃香供養する羅漢を、その上方には讃難供養する飛天を配している。

浮彫の技法は、漢代両城山型の画像石の様に凸出面を平面的に処理し、人物及び虎・馬等動物の描写は秦漢の瓦当、画像石の表現法と規を一にしている。また飛天の表現は同期の龍門賓陽中洞や蓮花洞より、雲岡期のそれに似て素朴な古拙味をもっている。

造像は正面の東壁に佛立像三体、佛立像の間には脇侍菩薩を一体づつあわせて四体、南壁と北壁にも東壁と同形の佛立像をそれぞれ二体、脇侍をそれぞれ三体造っている。全窟では佛立像七体、脇侍菩薩十体である。佛立像七体はほぼ同じ高さで約八m、菩薩は四mとその差は大きい。西壁には門口と明り窓を中心に壁面上部には三十三体の千佛のレリーフが表され、南北壁に接して約五m余の交脚像が二体、門口の右には三頭四臂の天王像、左には騎象の菩薩像が置かれている。窟は綿密な計画に基づいて造営され、各造像は互に有機的な連繋をもって整然と配置されている。これは、造営当時の貴族社会の佛教世界に対する理想を表明するものであり、また当時の佛教寺院の配置と内部荘厳を知る手掛かりとなる重要な遺物といえる。

七体の佛立像はいうまでもなく過去七佛、交脚菩薩像は弥勒菩薩である。ここで想起されるのは、北魏の沙門統で雲岡石窟の造営を文成帝に奏請した曇曜の譯経中にある『大吉義呪経』である。その第一巻に「七佛真済、毘婆尸、尸棄、比縻婆阜、訖囉迦孫、迦那迦牟尼、迦葉、釋師子両足之尊、有大名称、弥勒在兜率天与大衆囲繞、我至心念、過去一切諸佛、未来一切諸佛。」とあり、釋迦以前の諸佛の名称を示すと共に弥勒菩薩を第八の佛として挙げている。続けてその第二巻には七佛を信仰する現世利益を説いている。(2) 過去七佛と弥勒菩薩との関係については『魏書』釋老志が更にはっきりと次のように述べている。「釋迦前有六佛、釋迦継六佛而成道、處今賢劫文言、将来有弥勒佛方継釋迦而降世。」このように、北魏の佛教思想には、過去に六佛があり、釋迦はその第七番目に人間世界を救い、弥勒菩薩は釋迦を継いで将来人間世界に出現するという考え方が深く浸透していたようである。釋老志に言うよう

に、過去七佛と弥勒は本来互に一方があって、初めて成り立つ信仰の対象といえる。「佛洞」の中心思想は、北魏で最も流行した『妙法蓮華経』と三世佛信仰を最も深く表現しているといえよう。[3] 印度のガンダーラには早くも七佛と弥勒菩薩を加えた八体の列像が見られ、[4] 中国でも雲岡第十・十一・十三窟や、[5] 龍門石窟古陽洞には過去七佛に弥勒菩薩を配している例が見える。しかし雲岡石窟と龍門石窟の例は、全窟が七佛・弥勒像窟を中心として造営されたものではない。統一された計画のもとに、一堂に過去七佛・弥勒像を中心に造像が有機的に配置されているのは慶陽寺溝石窟の佛洞と一対とみられる涇川王家溝石窟の東方洞を除いて他に例がないのである。

七体の佛立像はほぼ一様の調子に彫られ、威風堂々としている。頭部は大きく、その割には体躯はつまっており、五頭身位であろうか。この様な表現法は雲岡第十八窟佛立像など、雲岡早期の造像に普辺的に見られる現象で、造像の内より外に表出する力強さを深めている。面相は眉がゆるやかに弧をひき、目は左右に長く、目と眉との距たりが大きい。耳は巨大で長く垂れ、小鼻は広く少々不細工な感を免がれない。要するに顔面の大きさに対して、目鼻立ちが大きく表わされ、尊厳さと威風を表示し、全体を強い雄偉な表現にしている。体軀は肩幅が広くはりがあり、胸部は平板で腹部が突出し立方体的な重量感があって堂々としている。右手は胸にあげ、左手は胸より下げて施無畏与願印をなしている。掌は顔面程の大きさで、厚みがあり印象的である。佛像は各々上衣下裳の漢式の服を着用しているが、上衣は胸を開き、内衣を二重に見せている。肌着の紐を内側に、その上に重ねた内衣の紐を上衣の外に長く垂らしている像もある。上衣の両袖は長く、衣文が流動的な線と面によって幾何学的な波を形成し、重厚・寧静な全身に一種の動感を与えている。この衣文の表現法は、雲岡第六窟の七佛立像から龍門賓陽洞佛立像に至る手法が更に発展したものであるが、衣文の流れが等間隔の波に整理され、自然さが失われて一層図式的になり、衣皺も雲岡第六窟および龍門造像の階段式から波式に発展し、正光佛の衣文のタイプに近くなっている。七佛の造像の後壁に表わされた光背は巨大な火焔の挙身光で、その尖端が天井の台形下部から頂まで延びている。様式は賓陽洞佛立像の光背に近い。

各脇侍菩薩は、本尊七佛の光背が相接する中間に侍立する。高大な本尊に対して、その半分位の高さの脇侍菩薩は

小さく可憐である。宝髻に花をつけた冠は簡素でこれらの菩薩像にふさわしい。頸にかけた胸飾は逆宝珠形で六世紀前期様式の特徴を示す。両肩に羽織った天衣は下に垂れ、腹部を中心にX形に交わっている。下裳は下部拡がりになり、衣文は刻線によって表している。面相は各々やや差異が認められるが、一般に豊かで目鼻立ちに気品があり平穏清楚な雰囲気をかもしだしている。脇侍菩薩として本尊佛に対する敬虔さを表現することに成功していると言えよう。体軀は柔く丸味はあるが、立体感には乏しい。面部の表現、衣服のタイプ、衣文の処理などは龍門賓陽洞の菩薩立像より鞏県の菩薩に近い。

前壁の交脚弥勒菩薩像は二体あり、各々七佛に比す大像である。宝冠を載せ、天衣・胸飾をつけた菩薩形でありながら、頭部から体軀にかけて彫りが粗放で丸みに欠けているので、脇侍菩薩よりはるかに峻厲な感がある。頭部の造形は方柱の様に角ばり、顔は扁平で鼻稜は鋭く漢代の石人の様である。アーケイックスマイルと称せられる唇の彎曲も七佛や脇侍菩薩より強く、見る人に異様な感を与える。衣文の彫りは浅く大雑把で、これらの表現が相まって此の像を象徴的な、神秘的なものにしている。未来に現われる弥勒菩薩の持つ神秘性が強調されているものであろうか。

門口の両側には、右には三頭四臂の天王像、左に騎象の菩薩像が前壁の弥勒菩薩像に各々接して造られている。印度において梵天と帝釈天が佛法守護の神として、或は佛の脇侍として門口の両側に置かれたのは極めて早い。しかし、梵天を三面四臂に、帝釈天を白象に乗った姿で表わしたのは一般に七世紀以降と考えられるので、この二像をもって梵天帝釈と速断することは危険である。また造型的にも作風が全く異なるので、一対の天部像と見るより、各像がそれぞれ異なった意図に依って造られたと考える方がよい。先ず門口右側の三面四臂の天王像は、方形の基壇の上に結跏趺坐し、四臂のうち後方上部の第二手にそれぞれ日月を、前方下部の第一手にそれぞれ金剛杵を持っている。顔部は三面のうち正面が慈悲の温顔、左右は眉をしかめた忿怒相である。頭の背後の壁面には山岳が浮彫りされ、この像がアスラ(阿修羅)であることがわかる。[6] 敦煌莫高窟第二百四十九窟の伏斗形窟頂の西斜面には、中央に大きな須弥山があり、山頂に城を、その下には大きなアスラ神が立っている。莫高窟のアスラ神も四臂で第二手の左右に日月を持つが、これは四目である。[7] 雲岡石窟でも、アスラなど日月を

手にした多臂の天王像が各処に表されているが、その中でも第七窟・第十窟・第三十九窟の天井には須弥山に接した三面多臂像が浮彫りされている。[8] ちなみに曇曜の訳した『大吉義神呪経』巻二に八阿修羅が佛法を守護する神として説かれている。[9] さて佛洞のアスラ像は、窟内各造像の中でも特異な表現を採り、弥勒菩薩より一層簡略化され、顔面の造型はより抽象化されている。頭部は上部が角ばり、頬は円形を成し、顔面の眉・鼻は稜角で交わる面で構成されている。体軀は全体にふっくらと丸味を帯び、衣は身体に密着し全く装飾はない。この荒々しい簡明な手法は、佛法を守る戦闘の神としてのアスラ神を表現するため、彫像の内在する迫力を突出させる概括的な手法として効果的である。

騎象の菩薩像は、前に膝をついた羅刹を、後に片膝を立てた比丘を伴っている。菩薩は宝冠を載せ、胸飾・天衣・下裳（裙）を着け、象の背に斜前を向いて坐り、右足を垂し左足は右膝に組んでいる。『法華経』普賢菩薩勧発品第二十八に拠ると、普賢菩薩は法華経を誦持する者の前に、六牙の白象王に乗ってその身を現し、人々の諸害を除き、法華三昧成就の時、その行者の前に出現するという。この騎象菩薩は正に行者の比丘の前に出現した普賢菩薩を表わし、前に両膝をついている羅刹跪像は征服された諸害を表わしたものと思われる。これは当時の法華経信仰の表われであり、雲岡石窟にも第十三窟南壁の七佛立像の下部小龕に騎象菩薩の造像例が二例認められる。[10] 雲岡の例も七佛立像の下の交脚弥勒の龕に、普賢菩薩を表していることは注目される。ただ雲岡の例は佛洞の普賢菩薩よりはるかに小さな浮彫であり、丸彫りに近い大型の普賢菩薩像としては中国最古の遺例として重要である。ちなみに、この様なタイプの造像は龍門には見られず、北斉・隋になって現われてくる。この普賢菩薩像のおだやかな動作、安らかな相は、見る人をして親しみをいだかさずにはおかない。とりわけその顔は、秀でた眉、優しい目、微笑をたたえた口元、ふくよかな頬になんとも言いようのない清らかな美しさがある。全身のプロポーションも均衡がとれ、静かな動きのなかにも生命力に満ちあふれた優れた彫像と言える。

羅刹は頭が大きく身体が小さな児童形に造られ、顔は眉をしかめ、ちょうど親から叱られたいたずらっ子という感じで、ユーモラスな表情をしている。比丘も同じく頭部が大きく、丸々と柔かく造られている。手には博山香爐を持

ち、普賢菩薩の庇護の下に安心しきったように安らかに陪坐する。白象はこれら諸像の台座として、写実的ではあるが簡潔な手法で彫られ、中心である普賢菩薩をきわだたせることに成功している。

「佛洞」外壁には門口の両側に大きな金剛力士および獅子を彫刻している。二体の力士像はやや風化しているが、原形は知ることが可能である。南側の金剛力士像の手が欠け、獅子は頭部を失い、足もとの基壇も土に埋もれている。南側の金剛力士像は革の鎧を着け、重量感があるが、頭部をやや内側に曲げ、身体をひねり動感をだしている。頭部はひたいが広く、盔は戴せていない。顔の造型は眉から目にかけて立体性を強調し、迫力を感じさせる強い表現手法を採っている。北側の金剛力士像は革の鎧を着け、頭には盔をいただき、どっしりと足を踏まえて荘重な体軀は微動だにしない。面部は前者の立体的な彫法と異なり平面的ではあるが、大きな目に怒気を含み、口をきつく結び、剛強な意志と厳粛な態度を示す。しかし、金剛力士は二体共に体軀の表現に変化が少く固さが感じられるのは否めない。金剛力士の外側に蹲まる獅子は、角ばった動感の少い巨体を地に横たえ、口を大きく開けている。その彫法はすこぶる象徴的で、硬く、彫刻と言うより建築物に付随した彫り物というにふさわしい。

総じて「佛洞」の構造は、涇川王家溝石窟「東方洞」と共に中国の石窟寺院では例のない特異なものである。即ち、過去七佛・弥勒菩薩を本尊として、統一的な計画のもとに一大伽藍を完成させている。各彫像はそれぞれ教典の規範する形象に依拠して、各種異った役割を果しながら、互に内在的連係を有機的に保ちつつ、究局的には過去七佛・弥勒菩薩の信仰にと盛りあげているのである。この様な構造の石窟は北魏時代に造営された他の石窟には見られない。しかし、北魏の首都があった雲岡と龍門にこの種の石窟が無いからといって寺溝の「佛洞」と王家溝の「東方洞」が中央の影響を受けなかったとはいいきれないのである。まず「佛洞」も「東方洞」も内部構造は石窟寺院というより木造の伽藍に近い。また、これまで見てきた様に、「佛洞」の佛・菩薩像の造型は、龍門賓陽洞あるいは鞏県石窟に相通ずる特徴を見えていることを知った。すなわち「佛洞」は中央の洛陽における寺院の構造を模したと考えられるのである。ただ石窟寺院としては統一的な計画で進められたにもかかわらず、佛・菩薩の造像と天王・金剛力

士など各像の造型上の手法に、相当大きな距たりがあるのはどうしたことであろうか？　これは各像の本来異る性格によるという解釈では解決できないものがあり、「佛洞」の規模があまりにも大きかったため、各地の工人を集めて造営したのではないかと想像されるのである。

ところで、この様な大規模な石窟寺院を発願したのは誰であろうか？

二

慶陽寺溝石窟「佛洞」と全く同じ構造をもつ石窟として、前に涇川王家溝石窟の「東方洞」についてふれた。「東方洞」は窟のタイプ、造像の内容と配置・様式に至るまで同じ意図の下に造営されたといえる。王家溝石窟「東方洞」には、以前この石窟内に立っていた『南石窟寺碑』と称する造営時の碑文が涇川県文廟に残っている。碑文の末尾に「大魏永平三年歳在庚寅四月壬寅朔十四日乙卯使持節都督涇州諸軍事平西将軍兼華涇二州刺史武安県開国男奚康生造」[11]とあるので、「東方洞」は北魏永平三（五一〇）年に涇州節度使・平西将軍で華州と涇州の刺史である奚康生が造営し、当時は南石窟寺とよばれていたことが知れる。

一九二五年、陳万里らによって涇川王家溝石窟が発見された時、陳万里はこの碑文を採録し、「いわゆる〈南石窟寺〉があるならば、当然それと対をなす北石窟寺があるはずだ。」[12]と想定したが、現在この南石窟寺と同じ構造をもつ慶陽の寺溝石窟「佛洞」の発見で、彼の仮説が実証されたことになる。確かに、慶陽寺溝石窟第二百五十七号窟には、唐則天武后期の題記があり、これに「大周□□……寧州北石窟寺」とあるので、寺溝石窟は早くから北石窟寺とよばれていたことがわかるのである。

寺溝石窟が王家溝石窟の南石窟寺と一対をなす北石窟寺であることは明かになったが、寺溝石窟には北魏の題記或は碑文の類は残っていない。この窟の由来を説明する史料としては、「佛洞」内にただ清乾隆六十年の『重修石窟寺諸神廟記』という碑石があるにすぎない。その碑文には〝……今原州之東、有右□□、粤稽厥初、葢（蓋）剏（創）自元魏永平二年、涇原節度使奚侯剏（創）建。其泉石清幽（幽）、境況奇幻、龕像宏壮、閣楼厳峻、似有非人力□為。」とある。又「佛洞」門口南側の外壁には『原州彭陽県石窟寺盂蘭会記』と題する石碑の残欠が嵌めこまれている。こ

の碑文には、北宋哲宗の紹聖元（一〇九四）年に彭陽県令の高舜兪が撰したと記されている。『鎮原県志』巻十九 芸文記には、此の碑文が再録されていて、その按語に、「石窟今在県東九十里、元魏永平二年涇州節度使奚侯[13]（侯の誤記）創置、窮石為龕、金碧輝煌、室内容数百人。宋（唐の誤り）咸通八年、彭陽県令柳公図重修……」とある。以上二つの記載によっても、「佛洞」即ち北石窟寺は涇州節度使の奚康生が北魏永平二（五〇九）年に創建したことが明らかである。

『魏書』巻七十三には奚康生の記述があり、それによると奚康生は勇猛で一世を風靡した、北方民族の代表的な武将で、戦争で功績があったので右衛将軍、河南尹、内外三都大官等中央の高い官職にあり、侯の爵位を受けた人であるという。

『魏書』巻七十三には又、彼が寺院を各地に建立したことにふれている。「康生久為将、及臨州尹、多所殺戮。而及信向佛道、数捨其居宅以立寺塔。凡歴四州、皆有建置。死時五十四。」とあり、この記載から、南・北石窟寺の造営は奚康生が各地に建立した寺院の一連のもので、永平二年から三年に、奚康生が四十三歳の頃相次いで造営が始められた一対の石窟寺院ということになる。

涇州の南北の要衝に、大規模な南・北石窟寺を開鑿した目的については、『魏書』の「康生が軍事上の殺戮を懺悔せんと、佛道に帰依した為である」という記述はそのまま単純に信ずることはできない。奚康生は戦功を積んで右衛将軍・河南尹・内外三都大官の要職にまでのぼり、その死まで政権の渦中にあった程の人物である。

さらに『魏書』巻八の永平二年正月の項には、「涇州沙門劉恵汪聚衆友、詔華州刺史奚康生討之」という記載が見える。これは奚康生が北石窟寺の造営を発願した年である。沙門劉恵汪聚衆起事の記載は簡単なので、その性質については明らかではない。ただ、永平三年にも涇州から近い秦州に同じような沙門を指導者とする蜂起が起っている。[14] しかもその僧は劉姓である。この佛教蜂起は互に直接の関連を示す材料は無いとしても、甘粛省東部にあたる地区で相次いで起ったことに注目すべきであろう。

孝文帝が推進した北魏の漢化政策と佛教奉信の風潮は、宣武帝に至って更に進み、ようやく社会矛盾が表面にあらわれてきた。宣武帝は即位後、大いに土木工事を興して豪華壮麗な寺を各地に営造し、その風は貴族、地方の豪族に

まで及び、全国に建立された寺院は膨大な数に上った。洛陽城内だけでも建立された寺院は五百余所に上り、州郡をあわせれば一万三千七百余所に及んだといわれる。[15] このような寺院の造営には当然大きな経費と労働力を費したことから、税はますます苛酷に取りたてられ、金銀の市価は暴騰し、労役は頻繁に行なわれた。[16] 民衆はこのような残酷な搾取に反抗して起ち上り、六世紀に入ると農民蜂起が一段と急増している。しかも、この時期の蜂起は、沙門が指導している例が少くない。中でも注目すべきは、延昌三（五一四）年幽州の沙門劉僧紹の蜂起で、自ら「浄居国明法王」と称していることである。[17] それより十数年遡る太和二十三（四九九）年、同じく幽州の王恵定もまた「明法皇帝」を自称して蜂起を起している。[18] 「明法王」「明法皇帝」として僧侶が事を起すこと自体は、或は首謀者の僧侶が民衆の信望を利用して自らの野心を達成する手段だったかも知れないが、民衆の側からいえば、「明法王」「明法皇帝」の出現を待ち望むということ自体、暗黒社会における民衆の切実な願望が反映されているといえよう。すなわち、釈迦如来に継いで弥勒如来が下生するとき、明法王の統治の下に理想的な世界が出現し、民衆を拯救するというのである。五〇九年と五一〇年に起った涇州・秦州の仏教蜂起が、幽州のそれと関係があるとは必ずしも言えないが、ただ性質は非常に似ているといえよう。少くとも当時甘粛の東部地方に反乱の起るべき土壌があり、それが僧侶の率いる仏教蜂起であったことから、反乱を平定を命ぜられた総指揮官の奚康生をして、蜂起鎮圧の後ただちに南北石窟寺を発願させたのであろう。上述の『魏書』巻八の奚康生が沙門劉恵汪を討ったという記載には、奚康生の肩書きを華州刺史としているだけだが、『魏書』巻七十三の奚康生の伝では「出為平西将軍華州刺史、頗有声績。転涇州刺史、仍本将軍。」とあり、劉恵汪平定の功により涇州刺史に任命されたものであることがわかる。反乱平定後の地方を統治する新任の地方長官として、涇州の民衆の不満な情緒をおさえるには、逆に民衆の厚い信迎を利用して懐柔しようとしたのである。南北石窟寺は、過去七佛から弥勒菩薩へと信迎を盛りあげているのは、奚康生自身が弥勒下生の際の統治者であることを、民衆に印象づけるためであったかも知れない。

＊　＊　＊

慶陽寺溝石窟「佛洞」に見られる石窟の構造および内容

と造像配置は、雲岡・龍門等地の北魏の石窟には類のないものである。しかし、南北石窟寺が奚康生という洛陽出身の高官によって造営されたことによって、窟の内容は中央である洛陽の寺院にその範が採られたことは想像に難くない。石窟として、その形制が木造建築を模した新しい発展を示すものとして重要である。さらに、この窟の造像様式については、甘粛という地方にありながら、西域・敦煌の直接的影響は認められず、雲岡・龍門の延長としての意味をもつものである。佛・菩薩の造像様式は、龍門の賓陽洞或は鞏県石窟の造像と共通した点が多く、衣服・光背のタイプは龍門石窟の造像と基本的に同じものである。よって、「佛洞」は洛陽寺院の規範にそってその形制を採用し、一部の造像は、洛陽から連れてきた工人の手になるとも考えられる。これら中央の工人と甘粛東部地区の工人の伝統的技法が結合されて、独自な地方的風格を形成しているのではなかろうか。しかし、涇州という文化の中心よりやや離れた地方は、工人の技術が中央より保守的だったであろうし、その水準も高いとはいえないだろう。その上、永平年間の頃は、正に龍門石窟造営の最盛期にあたり、洛陽からより多くの良匠を連れてくるわけにはいかなかったことは当然である。「佛洞」七佛造像に示されるように、洛陽の龍門タイプを踏襲していながら、造像様式においては雲岡石窟造像に見られた線の太さ、豪放さという拓跋族の英雄的理想形が残っているのである。同時に、弥勒菩薩像・アスラ像・獅子および浮彫等の簡明朴訥な特徴からは、この地方の民間石匠の伝統技術が脈々として根強い力を持っていて、佛教造像の造形に影響を与えていることが表明されるのである。

これらの造像が造られた永平年間というのは、ちょうど佛寺・佛塔造営が洛陽と全国各地で最高潮を迎えた時期であり、いわゆる龍門様式という造像様式が各地の造像に影響を与えていた時期であることをあらためて認識する必要があろう。

〔註〕

(1) 〈摩訶薩埵本生〉は北魏で流行した本生であり、龍門賓陽洞、敦煌莫高窟第四百二十八窟・第二百五十四窟等にも見える。サッタ太子が竹林中で投身する場面に七匹の虎を表すので、『金光明経』第十七品に拠ることがわかる。北魏の漢訳佛典ではほかに『六度集経』巻一、『菩薩投身餓

虎起塔因縁経』、『賢愚経』第一、『菩薩本行経』巻下などがこの本生を載せている。

(2) 曇曜訳『大吉義咒経』第二巻、「是諸如来依此諸樹成等正覚、七佛世尊有大神力、長夜擁護是持咒者、使常安吉於経常日并諸宿会、都無凶患等同於吉。」

(3) 鳩摩羅什訳『妙法蓮法華経』方便品第二、「過去諸佛以無量無数方便種々因縁譬喩言辞。而為衆生演説諸法、是法皆為一佛乗故、是諸衆生従諸佛聞法、究竟皆得一切種智。……未来諸佛当出於世、亦以無量無数方便種々因縁譬喩言辞……。」

(4) A. Foucher, L'art gréco-bouddhique du Gandhara, Paris 1905-1918, Tome II, Fig. 77, 457.

(5) 水野清一・長広敏雄『雲岡石窟』第八巻、四七頁、第十巻、一三頁。

(6) 西晋法立・法炬訳『大楼炭経』巻二阿須倫品第五、「佛言、須弥山下深四十万里中有阿須倫。」

(7) 敦煌文物研究所編『敦煌壁画』第四四図、一九六〇、北京。

(8) 水野清一・長広敏雄『雲岡石窟』第七巻、一七、一九頁、第九巻、六九頁。

(9) 曇曜訳『大吉義神咒経』第二巻、「有八阿修羅王、毗摩質多囉阿修羅王、修質多羅阿修羅王、羅睺阿修羅王、苦婆利阿修羅王、鉢羅度阿修羅王、茂至連達囉阿修羅王、那縛豆嚧阿修羅王、那茶阿修羅王等、眷属輔相応護此呪。」

(10) 水野清一・長広敏雄『雲岡石窟』第十巻、一七頁。

(11) 陳万里『西行日記』一四九、一五二頁、一九二六、北京。

(12) 同上、三六頁。

(13) 『魏書』巻七十三に「奚康生、河南洛陽人、其先代人也、世為部落大人、祖直平遠将軍、柔玄鎮将、入為鎮北大将軍、内外三都大官、賜爵長進侯」。とあり、奚侯とよぶのは自然である。

(14) 『魏書』巻八、世宗紀、永平三年二月条、「壬子、秦州沙門劉光秀謀反。州郡捕斬之」。

(15) 『魏書』釈老志「延昌中、天下州郡僧尼寺、積有一万三千七百二十七所」。

(16) 『魏書』巻十九中、任城王澄伝、「佛寺功費不少、外州、各造五級佛図、又数為一切斎会、施物動至万計、百姓疲於土木之功、金銀之価為之踊上」。

(17) 『魏書』巻八、世宗紀、延昌三年十一月条、「丁巳、幽州沙門劉僧紹聚衆反、自号浄居国明法王。州郡捕斬之」。

(18) 『魏書』巻八、世宗紀、太和二十三年十一月条、「幽州民王恵定聚衆反、自称明法皇帝、刺史李粛捕斬之」。